



## サツマイモ基腐（もとぐされ）病を 防除する

畑作研究領域  
畑作物生理・遺伝グループ  
小林 有紀

### カンショ（サツマイモ）産地で 深刻な被害をもたらしている病害

南九州および沖縄県のカンショ産地で株立ち枯れや塊根（イモ）の腐敗が多発し、深刻な収量低下が問題となっています。そこで、農研機構生研支援センター「イノベーション創出強化研究推進事業（2018年度緊急対応、2019～2021年度）」（以下、イノベ事業）の支援を受け、農研機構と病害発生県が協力し、病害の発生実態の解明および診断・防除技術の開発に着手しました。本症状には、乾腐（かんぶ）病、つる割病、茎根腐（くきねぐされ）細菌病等、複数の病害が関与していましたが、2018年に国内で初めての発生が確認された基腐病が、壊滅的な被害をもたらし、その勢力を拡大していることが明らかになりました。



◀基腐病の発生により収穫皆無となった圃場。

### 基腐病の発生生態を知り 防除対策を考える

サツマイモ基腐病は、病原菌（糸状菌の一種）が罹病種イモあるいは土壤中に残った罹病残渣から苗に感染し、苗床や圃場で発生する病害です。発病株には多数の胞子が形成され、この胞子が激しい風雨や圃場の停滞水を介して移動し、周囲の株に感染すると考えられます。カンショの茎の基部が発病すると、地下部の茎、しょ梗、塊根へと腐敗がゆっくりと進展します。また塊根の腐敗は、貯蔵中にも広がります。したがって、未発病圃場から採取した健全な種イモを利用すること、罹病残渣（特に腐

敗塊根）を圃場外に持ち出し埋没させるなど適切に処分すること、圃場の排水性を向上させる対策をとることは、基腐病の防除に有効な手段と考えられます。



▲基腐病により褐色に腐敗した紫イモの外観（上）と内部症状（下）。表皮に付着した黒粒（矢印）の中には、基腐病菌の胞子がたくさん詰まっています。

### 基腐病を防除するための 様々な取り組み

サツマイモ基腐病は本邦初発生の病害であるため、国内で利用できる農薬はありませんでした。そこで、基腐病に防除効果のある農薬を選抜し、2020年1月に、苗消毒剤（ペノミル水和剤）および茎葉散布剤（塩基性硫酸銅水和剤、炭酸水素ナトリウム・銅水和剤）が本病の防除薬として利用できるようになりました。この茎葉散布剤は発病後の治療効果は望めませんので、発病初期に罹病株を抜き取り、予防的に散布を行って病害の拡大を抑制することが重要です。イノベ事業では、この他、圃場外への持ち出しが困難な罹病残渣の分解促進や土壌還元消毒による防除技術の開発、抵抗性品種育成のための育種素材の探索、病害を識別する遺伝子診断技術の開発、病害発生要因・発生確率予測ツールの開発にも取り組んでいます。

本事業で作成した令和元年度版基腐病防除マニュアルが農研機構ホームページからダウンロードできます。  
[http://www.naro.affrc.go.jp/publicity\\_report/publication/pamphlet/tech-pamph/134198.html](http://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/134198.html)

